

# 伝統染織活動を通した子育て環境の創造-幼児教育機関を軸とした市民協働-

事業代表者 教育学部・准教授・佐々木和也

構 成 員 高根沢町環境課・課長・金澤公二

非営利特的活動法人ふるさと未来 SOU・理事・野村恵子

協 力 機 関 陽だまり保育園, 桑窪花づくり女性の会, 人形劇団くぐつ, フリースペースひよこの家

## 1. 事業の目的・意義

エコ・ハウスたかねざわは、高根沢町環境課の環境学習の拠点として環境学習・リサイクルショップ・資源ごみ回収機能等を有している。H23 年度から、指定管理者として非営利特定活動法人ふるさと未来 Sou が企画運営を行っている。

申請者は、これまでエコ・ハウスとの連携で、伝統染織を中心とした環境学習プログラムを開発し、定期的な学習会を開催することにより環境啓発を支援してきた。この資産を生かして、2008 年度より、幅広い世代で伝統的な和綿の栽培を通して地域を活性化する活動を、在宅介護支援センターの農地を利用して展開してきた。事業を通して、町の不登校児童・生徒の居場所フリースペースひよこの家、地域の保育園と連携体制を築き、家庭内で伝承されてきた和綿文化を地域モデルとして、地域創造に関わることで市民の育成に寄与し、当初の目的を達成してきた。これらをベースにして、本事業は、地域再生の拠点として注目されている幼児教育機関と連携し、地域で子どもを見守り、育てるという伝統的なスタイルの価値再生を、伝統染織の立場からアプローチすることを目的とした。

## 2. 事業内容

### (1) 伝統染織を活用した就学前環境教育開発

里山文化の会が蓄積してきた伝統染織に関する資産を、幼児教育に活用するための環境教育プログラムを保育園と共同で開発する。高根沢町の資産である豊かな自然環境の保存と継承に資するため、とくに生物多様性の視点から「藍」を活用したプログラムを中心に開発し、幼児期の CEPA 活動のあり方を検討する。また、今後もフリースペースひよこの家との連携により、不登校児のメンタルヘルス面に

ける効果についても考察する。

### (2) 保育所を拠点とした地域協働モデルの創出

今後の保育所には多様な機能が期待されている。(1)のプログラムの実施を共有化することで、地域の子育て文化を醸成するためのコミュニティ形成を図る。子育て世代はもちろんのこと、地域の市民や関係機関など様々な主体が参画し、協働していくことで地域の子育て環境を創造していく担い手の育成につなげていく。

## 3. 事業の進捗状況

最終年度として、町内の保育園・幼稚園が本事業に共同参画することで、里山の魅力を伝承するための啓発活動の基盤づくりが当初の予定であったが、2 年目の結果を受けて、陽だまり保育園の保育内容を深化させることで、町の子育て環境の創造および環境学習の方向性を探ることとした。その結果、藍染活動に留まるのではなく、伝統染色により各クラス T シャツづくりを、保護者との連携で行うことで伝統染織による子育て環境づくりの意義を伝えることとした。

今年度は、藍染活動を取り入れた保育に新たな視点を入れることとした。これまで、藍建てを毎年行っていたが、甕そのものを継承することとした。つまり、保育の区切りや都合で、まだ染められる（使える）藍甕を廃棄するのではなく、発酵を維持していくことで「つながり」を意識していくことにつながらないかと考えた。年長の年間活動の一つとして藍甕の攪拌作業が加わった。春先に継承したとき、2 甕のうち1つは菌の活性状態が芳しくなかったが、子ども達は諦めることなく攪拌を続けた。その結果、7 月初旬には図 1 のように発酵が復活した。2 ヶ月かけて復活するというプロセスが保育にとって大切

であるが、正直驚きの結果でもあった。



図1 復活した甕(左)と順調な甕(右)

そこで、この甕がこれから始まる藍染活動に大切なものであるという実感を深めるために、保育の日々の中で使う箸をしまう箸袋を作るための布を染めることにした。ペアになって正方形の布を絞り、いよいよ憧れの藍甕の中へ・・・ペア染め活動としたため、上手に息を合わせられた仲間、気持ちと手が同調しない仲間、集中しきれない仲間、いろいろであったが、とにかく間接的にしか見ていなかった藍甕から出て来たときの布の色(「青じゃない〜!」)が、みるみる変化していき(この時点で「青くなってる〜!」というが、これは信じてやまない気持ちが先行している)、水で洗うと初めて「青」と出会う。その時の表情たるものや素晴らしい表情をしていた。4月から何となく混ざって来ただけの状態で3ヶ月を過ごしたことが、青に出会えた感動を増幅したかもしれない。そして、1回目は染色力が弱い甕(図1左: 藍ちゃんと命名された)で染め、2回目は強い甕(図1右: 藍君と命名された)で染めた後の青の濃さの変化に再び歓喜していた。藍を「重ねていく」意味を体験してもらい、本活動となる藍Tシャツをどのような色にしたいかというイメージを膨らませることを意図した活動とした(図2)。

そして、藍の収穫、沈殿藍づくりと進め、お盆前に自分たちで育てた藍で収穫した沈殿藍を、継承した甕に加えてTシャツづくりが始まった。この時点で、子ども達のなかでも自分たちの藍甕になるんだ

という保育の区切りとした。そして、子ども達の気持ちは「紺色」という藍でも非常に濃度の高い藍色を目指していた。この思いを受け止めるために、お盆前に1回ずつ染め、地域連携ということで里山文化の会の会員が2回目を染め、お盆明けに藍を重ねる活動を展開した。1回しか染めない子もいたが、最高3回(5回染め)までとして紺色を実現していくこととした(図3参照: 藍の濃淡が異なる)。染めたい気持ちを引き出す支援、染めたいけど諦めてしまう子の支援など、丁寧に保育することは前提として、全員が同じ回数染めるという今までのプログラムから変更し、子どもの思いを尊重しながら活動を展開することとした。



(a) 箸袋のための絞り



(b) ペアで(a)の布を染めていく

図2 藍Tシャツづくり前の箸袋づくり

年長組の藍染活動に合わせて、各クラスのTシャツづくりも同時に展開した。特に、これまで保育側でTシャツの精錬(糊抜き)を行ってきたが、子どものTシャツを各家庭で下処理をしてもらうことから始め、染料集めや染色作業に保育参観というかた

ちで共同作業となるように設定した。その様子は、Facebook[1]あるいは添付資料1, 2をご覧ください。



図3 染め上がった年長組の藍T

また、本年度は保育園での文化活動として毎年人形劇を上演してくださる、鹿沼の人形劇団が主催する「くぐつの楽校」（こども夢基金助成活動）でも藍染活動を取り入れていただいた。幼児教育機関を軸にした活動が、地域の子どもの育ちを支援する団体等とコラボレーションすることで、より多面的な支援が可能となると考え、藍の栽培、叩き染め、生葉染め体験を取り入れた親子ワークショップ形式とした（添付資料5参照）。



#### 4. 事業の成果

自然遊びや体験の低下が著しい現代、子どもの豊かな発達を保障する環境「子育て環境」を市民が協働して創っていく観点は重要である。成果として、2013年度には、申請者が指導してきたふるさと未来Souの自主活動グループ「里山文化の会」が、陽だま

り保育園と連携して里山環境で藍を栽培し、藍染活動を展開しながら地域交流体制づくりを行い、一定の成果を挙げることができた。とくに、幼児教育では前例がない「すくも」（藍染の原料）づくりを達成できたことは特筆に値する。2年目の2014年度では、町内の他の保育園に活動の輪を広げ、地域の保育園の協働体制を築いていくのが目標であった。各園の保育方針や保育内容に新たな事業を展開するのは困難であるが、公立保育園である「にじいろ保育園」において、藍の栽培、生葉染活動が展開できたことは、地域の子育て環境づくり事業として評価できる。最終年度となる本年度は、前年度からの藍甕を継承するというスタイルを取り入れ、種の継承に加えて、発酵を維持していくことの難しさと同時に、自分たちの思いを実現していくために仲間と協力し、思考することを促す藍染活動プログラムを模索することができた。また、年長組の取り組みを全クラスに取り入れることで、保育園全体で子どもの願いや思いを共有することで、伝統的な子育て環境の意義を確認することができたと考えられる。

#### 5. 今後の展望

本事業では、幼児教育に伝統染織活動を取り入れることで、地域で子育てを支えることの意味を共有することを目的とした。NPO活動として長年取り組んできた人材や団体が幼児教育機関と協働することで、子どもが豊かに育つ環境創りの可能性を示唆してきた。今後は、これら資産をベースに、保育を支える保育士のキャリアアップや自然環境を使った保育スキルの向上を、市民活動のレベルで支援する仕組みづくりを展開し、地域での子育て支援環境構築を継続的に発展させていきたいと考えている。

#### 参考文献

- [1] 宇都宮大学衣生活環境学研究室 Facebook Page: <https://www.facebook.com/uuenv>
- [2] 佐々木和也, 神山晃一ほか, 生物多様性の視点をとり入れた藍染活動, 天然の色（天然染料顔料会議報告 2013）, pp.4-11, 2014